

外国人と共に学び、共に暮らす

# TOMONI-ともに-

滋賀県地域日本語教育推進事業ニュースレター

2025年度 Vol.1

滋賀県では外国人県民が地域社会で孤立することなく、安心して暮らせるよう、様々な地域日本語教育推進の取り組みを行っています。今年度もニュースレター「TOMONI～ともに～」で、様々な「日本語教育推進」の情報を発信します。

## 多様な地域づくりを支える日本語教育

滋賀県では、約30年前から南米出身者の増加にはじまり、近年は東南アジアの国々を中心に外国人県民が増え、現在は97か国・地域の約4万1,000人が暮らしています。地域や学校、職場で関わる機会が広がる中、コミュニケーションの重要性はより高まっています。

外国人県民と話す際、「英語」が一番通じると思われがちですが、実際には共通言語として最も有効なのは「日本語」です。ただし方言を含む日本語は、学習途中の方には難しく感じられることがあります。そこで役立つのが「やさしい日本語」です。「はさみの法則（はっきり・さいごまで・みじかく）」で話すことで、学校や職場、地域の現場で円滑なコミュニケーションにつながります。

子どもの日本語教育の現場でも変化が進んでいます。来日直後の幼児が保育園・幼稚園に入るケースが増え、保護者の支援とあわせて対応が求められています。学校でも、来日直後の子どもに加え、日本で生まれ育ち日常会話に困らない子どもも増えています。一方で、生活言語に問題がなくても、教科学習に必要な「学習言語」が十分でない子どもも一定数存在し、抽象語彙や教科書の理解でつまづくことがあります。

子どもの日本語教育は、大人とは異なり、学習言語と読み書きの育成が同時に進む点が特徴です。指導者は、母語の習得状況や家庭での言語環境、日本語習得段階や学習の理解状況を丁寧に把握し、個別の指導計画を立てる必要があります。滋賀県国際協会では、20年以上にわたり子どもに関する日本語指導者の養成や進路ガイダンスを実施してきましたが、日本

語教育の前に、「子ども自身が自分の背景やアイデンティティを肯定できる環境」が基盤としてあること、そのことが学習意欲を生み、将来へつながることを学んできました。日本語支援とあわせて、多文化理解を育む環境づくりも重要です。

こうした子どもの支援と大人の日本語教育に共通するのは、日本語教育の専門家による指導やアドバイスの重要性です。多様なニーズに対応し、効果的な日本語教育と多文化共生への理解の促進に、専門家とも連携すると共に、行政、企業、団体や大学、地域やボランティアの方との連携した取り組みが新しい課題解決の在り方を見つける手立てになるかもしれません。

県内には多くの日本語教室があり、地域と外国人県民をつなぐ役割を担っています。さらに、図書館や地域サロンなどで交流と学びが育まれる環境が整うことで、より豊かな地域づくりにつながるのではないかと考えます。

最後に、外国人県民の増加が続く中、日本語教育を地域の努力だけに任せるのは限界があります。全国どこでも適切な日本語教育が受けられる体制の整備は、国の重要な責務です。滋賀県からも、地域に負担が集中しない仕組みづくりについて、国へ継続的に提言していただきたいと考えます。



(公益財団法人滋賀県国際協会 光田 展子)

滋賀県では外国人県民が増加するとともに定住化が進み、地域社会の多様化が一層進んでいます。こうしたなか、生活者として地域で暮らす外国人県民にとって、日本語力や情報リテラシーの不足が、日常生活や行政手続き、地域との関わりを困難にする要因となっています。

外国人県民が安心して地域で暮らし、共に社会をつくっていくためには、生活に根ざした日本語教育の充実と、地域・行政・関係団体の連携が不可欠であると考えています。

そこで、Vol.1では、コミュニティを築き生活する外国人県民の立場から、さらに国際交流や多文化共生の視点で地域日本語教育に取り組む立場からといった様々な方々の声をお届けします。

## 滋賀から広がる外国人コミュニティの輪



安東ミズナさん

### BSLびわこスポーツリーグの取り組み

現在、私はフィリピン人技能実習生や特定技能者の監理・通訳の仕事をしています。2022年、コロナウイルスの影響が落ち着き、多くのフィリピン人が再び日本で働くようになりました。言葉の壁や職場での人間関係の難しさなど、さまざまな課題に直面しながらも、家族のために懸命に働く姿を日々見てきました。彼らの多くは、3年から8年という長い期間、家族と離れて暮らしています。中には、日本で働く前に0歳だった子どもが、帰国する頃には5歳になり、一度も会えなかったという方もいます。家族のために働きながらも、子どもの成長をそばで見られない寂しさ、帰国後の仕事の不安、日本語や人間関係のストレスなど、心に大きな負担を抱える実習生も少なくありません。そうした孤独やストレスが、時にはギャンブルや夜の遊びに向かう原因になることもあります。

このような状況を見て、「あなたは一人じゃない」「日本でも楽しめる場所がある」と感じてもらえる場を作りたいという思いから、滋賀県在住のフィリピン人を中心に、夫とともに『BSL(びわこスポーツリーグ)』というコミュニティを立ち上げました。夫も元技能実習生であり、日本での生活の大変さについて身をもって経験しています。

### 仲間と支え合うコミュニティへ

BSLの目的は、単にスポーツやイベントを楽しむことではありません。バスケットボールやバレーボール、フィリピン風クリスマスパーティーなどを通して、同じ境遇の仲間が集まり、相談し合い、励まし合う場を作ることが大切にしています。月2回のスポーツイベントには約200名が参加し、仕事の疲れを忘れ、笑顔で交流できる時間となっています。



### 外国籍みんなのために

当初はフィリピン人を中心に活動していましたが、次第に「滋賀で暮らす他の外国籍の方々にも支えが必要だ」と感じるようになりました。日本語の壁や文化の違いから、時に誤解やトラブルが生まれることもあります。そうした中で、外国人同士や日本人と交流できる場を作ることが大切だと考え、2025年10月19日に「第1回日本語スピーチ大会&のど自慢大会」を開催しました。



第1回日本語スピーチ大会

このイベントでは、インドネシア、ネパール、ベトナム、フィリピン、そしてヤンマーで働く外国人の方々も参加し、「日本語の上達」「働く意義の理解」「楽しみながらの交流」を目的とした新しい取組として大変好評をいただきました。また、この活動は滋賀県国際協会、滋賀YMCA、近江八幡多文化共生市民ネットワーク吉積先生、びわこ日本語ネットワーク、日本語交流教室安土、フィリピン側のMWO-OSAKA、OWWA、OISA、メイドインブラジル店、近江八幡ベトナム店(cho viet)、NK GARAGEの皆さまのご協力によって実現しました。

同じ思いを持つ人々がつながり、「滋賀県に住む外国籍の人々のために何かしたい」という共通の願いのもとで生まれたイベントです。

### これからの目標

現在、滋賀県には約4万1,000人の外国籍県民が暮らしています。

BSLびわこスポーツリーグは、これからも外国籍の方々安心して生活し、互いに助け合える地域づくりを目指して活動を続けていきます。スポーツ、文化、言葉、そして友情を通じて、滋賀から多文化共生の輪を広げていきたいと思っています。

# 日本語教室の活動紹介① 豊郷町「日本語読み書き教室」

「学びたい人のための日本語読み書き教室」が始まりました！

豊郷町隣保館では「日本語読み書き教室」を行っています。早いもので4年目を迎えました。これまでは「多様なルーツの人のための日本語読み書き教室」としていましたが、今年度からルーツに関係なく「学びたい人のための」教室として進めていきたいと考えています。

読み書きだけでなく、例えば「日本語のこういうところが不思議だね、面白いね」。そんな話ができる交流の場にもなればステキだなと思っています。

1回目の教室には、9名の受講生と4名の講師さんが参加してくれました。

豊郷町在住で中国にルーツのあるお二人とフィリピンにルーツのある母子、そしてネパールから技能実習生として豊郷病院に勤務されている4名のみなさんがそれぞれの講師さんと一緒に有意義で楽しい時間を過ごしていただきました。



カフェで地域日本語教育コーディネーター(左)と

隣保館では、料理教室や多様な文化の体験教室など、外国人住民が様々な年代の地域住民と交流できる場所となっています。

9月20日(土)13時30分から隣保館デイルームで「気まぐれカフェ」を開店しました。今回もたくさんのお客様が来店くださり、『うたごえ喫茶あおぞら』のみなさんをゲストに、和気あいあいとした「カフェ」になりました。この日は日本語教室の日でもあり、終了後に豊郷病院に技能実習生として勤務されている、受講生でネパール出身のクマリさん(写真右)がカフェに合流、コーヒータイムを楽しんでくれました。

偶然、病院でクマリさんが受け持っておられる方が来店されており、楽し気に笑顔でお話している場面がありました。クマリさんは「患者さまとこのような病院の外で出会えてよかった。私が教えたネパール語で『ありがとう』と挨拶してくれたのがとても嬉しいです。」と話してくれました。日々のお仕事の中で母国の言葉を交えてコミュニケーションをとっているクマリさんの笑顔がとてもステキでした。

(豊郷町隣保館・地域総合センター) 社会教育指導員 山崎 真由子

豊郷町隣保館「学びたい人のための日本語読み書き教室」  
毎月第2・第4土曜日の14:00-16:00

◆今後も滋賀県内の日本語教室の活動を紹介していきます。

## ●ご存じですか? 『くらしの日本語 in しが』

『くらしの日本語inしが』は、滋賀県の外国人県民の方々が日本語を勉強する際、学習や毎日の生活に生かしてほしいことを中心に作成しました。日本語教室では副教材としてご利用いただけます。第1部が「日本語を学ぶ」、第2部が「日本で暮らす」、第3部が「滋賀県を知る」となっています。滋賀県ホームページからPDFデータをダウンロードし、日本語学習教材として、ご自由にお使いいただけます。

指導者向けの使い方マニュアルも掲載していますので、ぜひご活用ください。

掲載先 滋賀県ホームページ

<https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/kurashi/kokusai/319833.html>



◀ 第1部 「日本語を学ぶ」より

滋賀県地域日本語教育推進事業ニュースレター「TOMONI-ともに-」に対する、みなさまのご感想を募集しております。良かった記事、もっと詳しく知りたい情報、外国人の方からのご意見など、どんなことでも結構です。下記までみなさまのお声をお寄せください。

滋賀県地域日本語教育推進事業事務局 (一財)滋賀YMCA nihongo@shigaymca.org



# 滋賀県主催「令和7年度日本語学習支援者セミナー 入門編」を開催

今年度は「日本語教育の参照枠」「異文化理解」「やさしい日本語」等をキーワードに、私たち一人ひとりができる地域や職場の外国人県民とのコミュニケーションについて、参加者のみなさんと考えました。

## 文化とは?

「日本文化」といえば、何を思い浮かべますか。歌舞伎、寿司、J-POP、可愛いキャラクターなど、外国人が憧れる要素も多いと思います。これらは「見える文化」です。それに対して、日本人以外にはわかりにくい「見えない文化」もあります。例えば、礼儀作法の根底に流れる他者への配慮や気遣い、価値観、時間の感覚、ウチ・ソトや上下関係といった職場マナーなどです。

さらに、日本は「察しの文化」と言われるように、言葉でははっきりと伝えるのではなく、相手が雰囲気や察したり空気を読んだり、言外の意味や状況によってコミュニケーションが成立してしまう文化でもあります。一方で、言いたいことは話し手が言葉ではっきりと伝えなければならず、聞き手が言外に相手の意図を読み取る必要はないという文化もあります。このことを心に留めておくと、外国人に対する誤解や思い込みもなくなるのではないのでしょうか。

日本語学習支援の際や、職場や地域の外国人の方と接する時も、日本の習慣やマナーに慣れていない人に対しては「ここまで言わなくても、わかるだろう」と思わずに、「やさしい日本語」や多言語を使って言葉できちんと伝えることも必要です。

## 文化相対主義の考え方とは

現代は、日本人も外国人も「自文化」と「異文化」に関わりながら共に暮らしている多文化共生社会です。自文化の価値観を大切にしつつ、異文化に触れる機会を増やしてみませんか。それぞれの文化に優劣はなく、価値観やものの見方が違うだけとする「文化相対主義」の考え方が異文化理解の第一歩ではないでしょうか。

非常識だと相手を非難する前に、なぜそんな行動をとったのか、自国の文化の影響かも知れないと考えてみましょう。まずは相手の話を聞いた上で、日本のルールを教えてあげてください。あなたの話を聞かせてください、という姿勢が求められるのだと思います。



発行: 滋賀県(滋賀県地域日本語教育推進事業事務局 〒523-0891 近江八幡市鷹飼町537-3 (一財)滋賀YMCA内) 文部科学省 令和7年度「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」活用 [2025年12月発行]

## 自己開示で異文化コミュニケーション

異文化間コミュニケーションでは、異文化を知り、自文化を客観的に見ることも必要です。そのために、まずは自分のことを知り、他者にも自己開示する姿勢が大切です。自分自身を客観的に見つめるための考え方、「ジョハリの窓」をご紹介します。

## ◆4つの窓から見つめる自分自身

	自分が知っている	自分が知らない
他の人が知っている	1 自己開示の窓 (Open Self)	2 盲目の窓 (Blind Self)
他の人が知らない	3 秘密の窓 (Hidden Self)	4 未知の窓 (Unknown Self)

ジョハリの窓※

自分が知っていて、周りの人も知っている第1の窓「自己開示の窓」が大きい人は、積極的で明るい人が多いとされています。また、私たちには自分も知らない第2の窓「盲目の窓」や第4の窓「未知の窓」も存在します。他の人の自分に対する反応への感受性が低いと、この窓が大きくなります。第3の窓は「秘密の窓」で、人には知られていない隠された部分の大きいと、他者とのコミュニケーションも消極的になります。みなさんは、どの窓が一番大きいでしょうか。

「自己開示の窓」が大きい人は、自己開示度が大きく、他の人の自分に対する反応への感受性も高いとされています。

1	2
3	4

異文化間コミュニケーションでは、上記のように第1の窓を大きくして積極的に自己開示をすることで、相手との信頼関係を築くことができます。ぜひご自身について、家族や友人、職場の同僚、見知らぬ人などをイメージして、どんな話題をどこまで自己開示できるのか、考えてみてください。

(地域日本語教育コーディネーター 北川 恵子)

## <参考文献>

原沢伊都夫(2025) 『異文化理解入門 [改訂版]』 株式会社 研究社 ※「ジョハリの窓」についての2種類の図も、『異文化理解入門 [改訂版]』を参考に作成。



文部科学省